S6-4

反り返りに対しボールを用いた理学療法で抑制効果が得られた一例

Case study:The effect of Physical Therapy using a Physio-Roll to opisthotonus in a TBI patient.

澤田　美由紀、槇林　優、吉池　佳代、篠田　淳、奥村　歩
木沢記念病院　中部療護センター

Miyuki Sawada, Masaru Makibayashi, Kayo Yoshiike, Jun Shinoda, Ayumi Okumura
Kizawa Memorial Hospital, Chuburyougo Center, Minokamo, Japan

【はじめに】背臥位は最も安定した姿勢であるが、安静時にいわゆる「反り返り」の状態を呈する重症脳外傷患者に対し、Physio-Roll(以下ボール)を利用した理学療法を実施したところ、筋緊張の変化を認めたので、若干の考察を交えて報告する。【症例と経過】1)症例紹介：脳挫傷(受傷後12年)の男性。2)全体像：安静臥位にて頚部・体幹伸筋の持続的収縮を認め、臥位での他動的な頭部挙上や端坐位が困難、常時努力性呼吸を呈していた。3)実施内容：背臥位で挙上させた下肢をボールに乗せ、股関節90度・膝関節90度の姿勢に近づけるよう、ボールの上下への弾み・前後左右への動きを利用して、患者様に対し緩徐に揺すりを与えた。開始直後から努力性呼吸は消失。徐々に反り返りが減少し、3ヶ月後には端坐位練習が可能になった。【結果】現在、端坐位は保持練習から動きを促す練習へと変わり、誘導による寝返り、長時間の車椅子乗車などが可能である。【考察とまとめ】本症例は12年という長期間で築きあげられた特異な姿勢状態であり、筋緊張亢進→知覚しにくい→不安→さらに筋緊張亢進→呼吸困難→努力性呼吸→著しい筋緊張亢進という悪循環にあったと考える。今回の「ポジショニング」と「ボール操作」は、頭部・体幹・上肢・下肢などそれぞれの筋活動の結合を取り除いた姿勢をつくり、それぞれの部位で面を感じられたと考える。臥位が安定したことで、そこから生まれる安楽な呼吸と運動が可能となり、現在に至っている。今回は一例であるが、この症例をきっかけに数例同様に良好な結果を認めており、今後科学的根拠が示せるようデータ収集に努めたい。